

林彪の死とそのナゾ

中嶋嶺雄

「キッシンジャー氏の忍術外交によって米中接近という世紀のドラマの開幕を告げられてからちょうど一年ののち、世界はまた一つの衝撃に見舞われた。毛沢東主席の後継者として自他ともに許していたはずの林彪副主席が、こともあろうに毛沢東暗殺計画に失敗してジェット機でソ連逃亡を企て、昨年九月十二日、モンゴルで墜落死したというショッキングな筋書きを、去る七月二十八日、いくつかのチャネルの外交筋を通ず形で中国当局は公表したのであった。

もとより、林彪事件に関しては、昨年九月の異変以来、さまざまな情報が交錯しており、林彪の死とそれに関わる異変の筋書きについても、徐々に輪郭が浮かび上がってきていて、とくに彼の死についてはほぼ既定の事実と考えられていただけに（私もそのようなことを二、三の論稿に書いたことがある。たとえば拙稿「米中会談の真実と残像」Ⅱ「諸君」一九七二年四月号Ⅱ参照）、一

種の衝撃緩和の装置が心理的にはでき上がっていたといえよう。とはいえ、「やはりそうだったのか」という感懐は、むしろ静かなる衝撃のゆえの波紋として定かな広まりをみせたし、一方、この一年間の中国が、とくに対外的に目覚ましい躍進を示したと誰もが感じていたがゆえに、そのような中国イメージを透かしていまや明確な実像となつた今回の事件がもつ含意はなおさら重く深いように思われる。しかも、副産物として、中国の動向をつかむことの困難さを改めて痛感させたばかりか、中国に関する雑多な情報の氾濫のなかで、香港や台北筋の情報がやはり無視できないことを見せつけたものでもあった。いうまでもなく、今回中国当局が確認した筋書きは、たとえば、いちはやく中国高官筋から内密にブリーフィングを受けていた日中党書貿易筋の有力者にとって既知のことであつただけではなく、「中共中央文件・中

発（一九七二）４号」と同付属文書「林陳反党集團反

革命クーデターを粉碎する闘争（材料の二）」とよつて、台北や香港から流されていたものでもあつたからである。

ところで、中国当局が林彪の死とその筋書きを公表してから、はや一ヵ月になろうとしている。この間、中国は林彪異変と関連して本年はとくに注目されていた八月一日の人民解放軍創立四十五周年記念日（建軍節）をはさんで今日に至っているが、林彪異変の公認の筋書きに残されている数多くのナゾを解き明かすに足る材料は依然として出ていない。一方、台北からは前掲の「４号文件」に次ぐ最新の重要材料として「中共中央文件・中発（一九七二）十二号」の原文が流されているが、それによつても、公認の筋書きをさらに補足し得るのみである。すなわち、毛沢東が昨年八月中旬から九月十二日まで地方視察旅行に出ていたことが確認され、わが国の北京特派員諸氏が北京消息筋の伝える真相として送った事件のより詳しい筋書き



九全大会で中央委選出の投票をする（左から）毛沢東、林彪、周恩来、陳伯達、康生ら中国首脳——69年4月

と一致していること、一九七〇年の廬山会議（中共二中全会）では、二日半にわたって、林彪、陳伯達らが黄永勝、吳法憲、葉羣、李作鵬、邱会作らの政治局委員やさらに李雪峰、鄧維山とともに毛沢東を攻撃し、林彪を国家主席にしようとする画策をはかったことなどが明らかになるのみである。

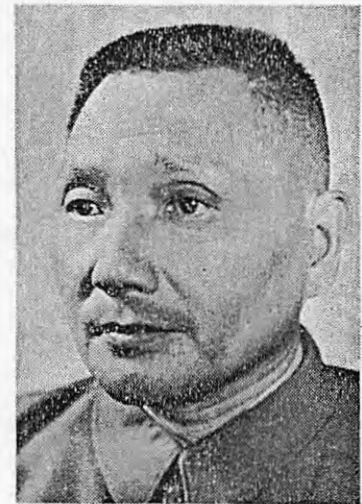
文革よ、革命外交よさらば

こうした材料不足にもかかわらず、われわれはむしろ最近の中国の諸情勢に見られる著しい変化のなかから、われわれが考えるべき特徴的な諸傾向を指摘することができ、そこにはやはり大きな問題が宿されているようにも思われる。

その第一は、林彪異変と前後して進んでいた旧幹部の復権がさらに進み、その範囲は、単に文化大革命期に批判された旧幹部の復権という域を超えて、これまでの中国共産党の路線闘争や大衆的批判キャンペーンの構図を書き変えようとしているかの感さえあることである。つい先日、かつて五七年の「百家争鳴」期の代表的知識人で、やがて反右派闘争によって激しく批判されて以来消息を絶っていた有名な社会学者の費孝通が十数年ぶりに姿を現わし、また文革初期に実権派として批判されたかつての共産主義青年団第一書記、胡耀邦が姿を現わしてわれわれを驚かせたが、いま



陳 雲



鄧 小 平

また、「大躍進」政策以来の穩健派で文革以来姿を消していた陳雲副総理や実権派時代の新華社長で「人民日報」編集長でもあった呉冷西が中国の公式の場に再び姿を現わそうとは、従来、予想できたであろうか。これらの旧幹部は、最近の文革否定・脱文革化の状況においてこそ初めて復権し得たのであろうし、そのような状況を主導的に形成していると思われる周恩来は、理不尽にも失墜していった旧幹部を救済することによって、その支持層を広く旧実権派、旧彭德懷グループ、旧右派分子のなかにも広げ、こうして彼の政治資本を拡充しようとしているかに見える。この傾向がさらに進むなら、中国の大衆に悪の代名詞として教え込まれた人物以外は、そしてそれらの幹部が今回の林彪異変に無関係であるのなら、たとえ文革期に激しく批判された人物であろうとも、思わぬ人物の復権がさらに進むかもしれない。つまり劉少奇の復権はあり得ずとも鄧小平の復権があり

得ないとは、もはや断言しにくくなっている。ともかく、中国人はいま文革を一場の悪夢として忘れようとさえしているかのように思われ、「文革よ、さらば」はいよいよ確固たる潮流になりつつあるようだ。

第二には、最近の対日態度の変化と対日接近への著しい傾向が示している外交的姿勢の変化である。この問題は、A.A.諸国の「毛沢東主義者」への中国の最近の冷ややかな態度と比較したとき、よりいっそう鮮明になろう。たとえば、一九六九年末に地下で再建されたフィリピン共産党は、完全な毛沢東主義者の党として最近でもルソン島中・北部一帯でゲリラ活動を続け、戦闘的な「毛沢東思想」の赤旗を掲げているが、当の中国は、こうした活動をすでにほとんど紹介しなくなったばかりか、手前勝手な「毛沢東思想」の称揚にいささか当惑気味であるかのような兆候さえみえる。こうして中国は「文革よ、さらば」とともに「革命

外交よ、さらば」の時期にも到達してしまったやうだ。

林彪糾弾のはじまり

そうしたときに注目される第三の問題は、林彪批判のキャンペーンが大衆的規模に進むなかで、劉少奇批判と同様、林彪の罪状が中国革命の諸段階にまでさかのぼって糾弾され始めていることである。もとより、このような方法は、路線闘争の敗北者に対しては常套的なことであるとはいえず、わずか数年前には、林彪が校長を勤めた延安の抗日軍政大学（抗大）の輝かしい事跡があれほど称揚されていたことを想うとき、まさに隔世の感がある。こうした罪状糾弾のバターンは、早くも昨年十一月、「紅旗」第一二二号が「野心家、陰謀家」の暴露を開始したとき、紅軍第四軍のなかの非プロレタリアート思想の存在を指摘した毛沢東の言葉が引用されて以来、その方向が示されていた（同誌の江蘇省党委執筆小組論文参照）。ここで紅第四軍とは、林彪が軍長をしていた中国革命の主力軍であったことは周知のところである。こうした方向は、今日さらに展開し、「紅旗」最新号（七二年第八号）の沈鈞署名論文にみられるように、一九四八年の遼瀋戦役でも林彪は日和見主義者であったとされるにいたっている。やがて、林彪の名を高からしめた抗日戦争での平型関の戦い

(一九三七年)にも、林彪の日和見主義が見いだされるのであろうか。

「陰謀」にソ連がカンでいた

そうした方向が進むなかで注目すべき第四の問題は、林彪の「陰謀」がソ連を背景にしたもので

あったといわんばかりの論調がいよいよ色濃くなってきたことである。確かに、これまでの失墜者にも「アメリカ帝国主義の手先」とか「蒋介石一味」とか「中国のフルシチョフ」とかの決定的なレッテルがはられてきたことについては、われわれの記憶にも新しい。しかし、今回の林彪異変における「対ソ内通説」は、これらのレッテルとは

異なったトーンをもっている喧伝されつつある。もとより、昨年十一月、「紅旗」第二二号が明らかに林彪批判を開始して以来、批判の対象とされた「野心家、陰謀家」は「外国に内通した分子」であることがほのめかされてはいた。だが、中国の当局が、ソ連へ逃亡しようとして墜落したジェット機に林彪が乗っていたのだと公表したのちに、この異変の背景にソ連がカンでいたのだと語り始めるとき、事態は決定的に重大な意味を帯びてくる。

毛主席暗殺を企てた林彪とソ連との結び付きという、もしも本当だとしたら、誰もが驚愕し、しかも、中国民衆に対して林彪異変を説明するにはこれ以上に格好な材料はないような事態の方向については、林彪の死にまつわる事件があまりにも深刻なものであるだけに、当然、予想された事態の推移でもあるような気がする。ここでは、この問題を考える前に、この問題に関する中国側の論調の推移をみておこう。

この問題については、林彪の死を中国当局が公表する以前の去る七月二十四日付け「人民日報」が、魯迅の三〇年代の闘争を紹介する形で、実は林彪が「モスクワからループルを受け取った」という非難を展開した。次いで八月になると、八日付け「人民日報」は「紅旗」第八号の紀平署名論文を転載し、林彪事件には「社会帝国主義」(ソ連)という「国際的な背景があった」ことを強調



文革の嵐の中で上海市革命委成立を熱烈に祝う大衆

した。同じ日に北京で、廖承志中日友好協会会長は、訪中していた黒田寿男日中友好協会正統本部会長に対して「林彪が以前からソ連側とひそかに連絡をとりあっていたこと」を打ち明けたともいわれている（「朝日新聞」八月十三日）。

問題がこのように展開されつつあることは、中ソ関係の現状にこれを照らしたとき、あまりにも衝撃的な意味を帯びてくるが、これに対してソ連側は現在いっさい沈黙を守ったままである。近い将来ソ連側が全面的に回答することも当然予想されるが、中国側にとっても、もしもこの筋書きが真実であるのなら、かつて珍宝島の軍事衝突に際して、連日、幾百万の抗議デモが展開された以上の民衆の反ソ抗議行動が起こってしかるべきであらう。だが、いまそのような気配は全くない。

ナゾは解けない

もとより、この点に関しては、林彪がモンゴルでの墜落機に本当に乗っていたのかどうかというナゾが解けない以上、問題をさらに推し進めることはきわめて困難である。周知のように、ソ連・モンゴル側は当初、中国外交部スポークスマンがモンゴルで墜落したのは民間旅客機で、進路を誤ったものだとして、同機は空軍ジェット機であり、墜落地点からは九名の焼死体と火器、文書、装備が発見されたと公表した。そして

のちにモンゴル当局はこの点に関し、同機の乗客は三五歳以下だったと発表したのち、あとでこれを五十数歳以下だと訂正した。一方、ソ連は、林彪の長男、林立果（空軍作戦部副部長）の身分証を発見したことをのちに明らかにしたといわれているが、それ以外はノー・コメントである。ソ連やモンゴル当局はのちにわが国に対しても、政府レベルにおいて、墜落機には林彪が同乗していなかったと伝えているはずであるが、中国の今回の公表が真実なら、ソ連にはあえて沈黙を守るべき理由があり、またあえてニセの情報を流したのであろうか。これらの問題をめぐるナゾは依然として解けないのである。

林彪が米中接近に反対し、対ソ関係を調整しようとしたであろうことについては、六九年夏の中ソ国境衝突に中国の軍首脳がいかに大きな衝撃を受け、ソ連の脅威をいかに大きく感じたかという問題からしても推測が可能である。現代の戦争にについてもなお抗日戦争期の毛沢東軍事思想に忠実に依拠した林彪の有名な戦略論文「人民戦争の勝利万歳」（一九六五年）を顧みるまでもなく、九全大会での林彪の政治報告そのものも、一貫して対ソ対決を主張したものであったが、中ソ国境衝突を契機にこのような認識を大きく変更したという推理も論理的に成り立ちやすい。この点からすれば、去る七月三十一日付け「星島日報」（香港）が伝えているように、林彪は軍事費の大幅な増額

週刊時事

9/2
50円

医薬分業はどうなった

● つきつめて考えるとき 水野肇

● 金融超額利が生んだ犯罪例

尾瀬からゴミを追放

― 美化袋で「持ち帰り運動」展開 ―

日中復交いよいよ本番へ

を要求し、同時にソ連との同盟をめざすことを要求して、周恩来と対決したのだという説明は、説得的である。だが、中ソ国境衝突以後、中ソ対決の危機回避に努力し、やがて中ソ国境会談へとことを運んでいったのはやはり周恩来でもあり、軍内では黄永勝総参謀長ではなかったか。そのことの功績によって、少なくとも林彪異変まで、周・黄のコンビネーションによるリーダーシップは、現象面をみているかぎり、きわめて顕著であったように思われる。

だとすると、林彪はもともと「ソ連と内通した陰謀家」であって、「人民戦争の勝利万歳」論文や九全大会での対ソ対決の姿勢そのものが「赤旗を掲げて赤旗に反対する」式の陰謀であり、ソ連との「内通」をカムフラージュする陰謀であったのだとみないかぎり、やはり説明がつかない。確かに、林彪の過去の経歴をたどれば、ソ連との関係が深いことはよく知られているが、そのことを



黄 永 勝

もってソ連との「内通」を証明することはできないし、ソ連側は毛沢東、周恩来を名指しして非難したことはあっても、林彪を名指しして非難しなかったという理由づけも、あまり説得的ではない。もしも本当に「内通」していれば、党規約にまで毛沢東の「後継者」と規定されたその成功を握りどころにして、彼はあらゆる点できわめて慎重に行動しつつ時間を待ったであろうし、二中全会において、あえて国家主席の地位を占めようと画策するようなことはしなかったであろう。

しかも、今回、公表された林彪の毛主席暗殺計画は、その成算と、もしもそれが成功したあとで起こり得る事態の予測についてはもとより、全体の構図があまりにも杜撰であって、中国共産党にかつて存在しなかったほどの「野心家、陰謀家」の「陰謀」にしてはあまりにも程度が低すぎる。「野心家、陰謀家」ないしは「劉少奇のたぐいのベテラン」の罪状暴露の筋書きとしては、よくで

きていても、どこかリアリティに乏しいのである。陰謀加担者が林彪、葉群、林立果という林彪一家のみならばともかく、これほどの恐るべき陰謀に、黄永勝、吳法憲、李作鵬、邱会作という軍の最高首脳の群像が果たして参画し得るものかどうか。

やはり問題は、九全大会以後の中国共産党中央部における深刻な党内闘争としてみなければならず、軍官僚対党官僚・行政官僚の対立という図式のなかで林彪らは失墜せざるを得ず、そうした政治内戦の血なまぐさい結果が毛沢東暗殺計画として描写されているように思われてならない。こうした上層部の角逐は、単なる権力闘争というよりは、広く今日の中国の社会的・政治的基盤のなかから必然的に生まれた歴史的産物であって、そうした深い背景と根源を解明せずに、中国の表面に現われる最近の穏やかな雰囲気のみで、事態を「台風一過」としてのみ見過ごすことはできないであろう。

過去形では語れない

かつて「スターリン批判」の衝撃に際し、ショックな暴露やハブニングの連続のなかで、スターリン主義生成の社会的・歴史的根源をソ連社会の制度的・組織的基盤にさかのぼって解明すべきことを主張したのは、イタリア共産党の故トリ

アッチであった。いまわれわれは、日中友好ムードと周恩来総理の卓越したソフト・ウェアの回路のなかで、中国社会を根源的につかもうとする努力を忘れかけているのではなからうか。

だが、いかなる意味においても、問題はきわめて深刻であり、それだけに事態の推移を中国民衆に説明する方法が差し迫って必要であったことは確かである。中国の民衆はこの事件を果たしてどのように受け取っているのだろうか。ともかく、林彪の死は確実であっても、この事件のナゾはまだ解けていないのである。

林彪事件はすでに過去のものとなったが、この事件がもたらした波紋と衝撃と懷疑とをいまだ過去形で語り去ることはできない。それは、林彪事件こそ、今日の中国が民族の生死存亡を賭けた一大革命運動だといわれた文化大革命の直接的な産物だからである。にもかかわらず、毛沢東・周恩来のリーダーシップのもとで、中国はこのいまわしき事件を、まるで何もなかったかのように経過し、中国の民衆も問題をさりとて「総括」してしまっているかのように見るのは、中国と中国人を何か透明人間のように扱っていることになりはしないか。中国は言葉の真の意味での大国であり、中国人は大人であるがゆえに、過ぎ去った出来事に対して、決してそのように淡白ではないように思われる。

(東外大助教授)